

ニューサウスウェールズ大学

私たちはオーストラリア研修中、ニューサウスウェールズ大学（UNSW）に通っていました。

UNSWは1949年に州・連邦両政府によって創設された国公立大学です。Group of EightやUniversitas21のメンバーとしてグループ大学内の実績や質の向上に努めると共に、世界の一流大学との間で学生やスタッフの交流、専門技術や研究の交換を行っています。600の学部と大学院から成り立っており、学生は約40,000人で、約5人に1人が海外からの留学生です。京都大学、東北大学、広島大学、慶應義塾大学などと提携・協定を結んでいます。

** Group of Eight: オーストラリアの主要8大学から構成される大学の連盟。研究・教育の質向上やハイレベルな学生の育成を目的とする。*

Universitas21: 世界13か国の国・地域の、主に研究に力を入れる21大学の国際ネットワーク。

私たちはUNSWで、英語の文法、発音、リスニング、長文読解などの勉強をしました。また、プレゼンテーションや大学生に対してのアンケートも行いました。

文 法：日本で勉強するような基本的な英文法に加え、“英語目線の英語”を学びました。例えば、formalな英語とinformalな英語です。公の場で話すとき、より多くの人々にきいてもらい納得させるために、formalな話し方が必要です。なので、よりformalな単語を使ったり、能動態ではなく受動態にしたりするということを学びました。また、Spoken EnglishとWritten Englishの違いや、日本とは違う英文法の構造理解の方法も学びました。

発 音：似ている発音の単語を練習したり、早口言葉に挑戦したりしました。

リスニング：少し長いビデオを見てワークシートに取り組みました。その答えについて話し合うこともしました。

長文読解：文章を読み、問題を解きました。日本の授業でもするような問題でしたが、少し難しいものでした。

プレゼン①：各人が会社や企業について調べ、2分間程度で発表しました。

プレゼン②：3人1組になり、各班のテーマに沿って調べ、大学生からアンケートを取り、その結果から15～20分間のプレゼンをしました。

プレゼン①②では、大学生のmentorたちがアドバイスしたり、手伝ったりしてくれました。その方たちは、大学で日本語を学んでおり、私たちの活動を助けるだけではなく、オーストラリアや日本についていろいろ話したり、市内観光（シドニー）に案内したりしてくれました。

I experienced many things that I can't in Japan. At first, I was surprised at the large campus and English was too fast for me to understand. However, day by day, I became able to understand. Also, through lessons at UNSW, I learned new aspects of English. I learned differences between formal and informal English and between spoken and written English, which I had not known. I think that it is important to be aware of these aspects when we learn English through Japanese. Even if we learn the same things, what we learn from them changes, according to where we learn them. So I think it is important to learn not only in Japan but also in foreign countries. Through this experience, I learned to have a broader view of things. I would like to study harder and go abroad again. (Reporter: NISHIDA, Nagisa)

参考文献

UNSW. 「ニューサウスウェールズ大学」. UNSW.unsw.jp, (2016年9月10日)

リサーチ・プロジェクト

二週間のオーストラリア研修。日本での自由な生活から離れ、海外に身を置くというのはかなり思い切りのいる決断でした。それも単なる旅行ではなく、授業をふんだんに取り入れた「学び」中心のスケジュール。日本に帰って来てしばらく経った今、オーストラリアで過ごした日々に現実感がなさ過ぎて、まさに「夢」のような時間だったなあと思います。

海外研修、そう聞いて想像されるような英語一色の生活は、主に大学内で繰り広げられました。初めの週は英語での講義が中心でしたが、土日を含み二週目に入ると、プレゼンテーションの準備のための時間が大半を占めるようになっていきました。プレゼンというととても難しいことのように聞こえますが、このプレゼンこそ私が大学で過ごした時間の中で一番充実し、かつ楽しかったものであることは間違いありません。

私達九人は三つのグループに分かれ、割り振られたオーストラリアのボランティア団体について調べました。各グループに一人ずつグループリーダーと呼ばれる大学生がつき、プレゼンについての指示や手直しをしてくれます。一体どんな人達なのか？ということで、私たちのグループリーダーを紹介します。女子の憧れる女子、という形容詞がぴったりなマーシャ。いつもニコニコしていて可愛いアン。気が弱そうに見えて、優しくて人気者のケニー。三人には色んな面で助けてもらい、この人たちなしでは完成は無かっただろうなあと思います。

プレゼンをするためには、自分たちがその対象についてよく知っておかなくてはならないので、一番初めには大学内のコンピューター室で情報収集。そして次に、キャンパス内の学生にマーケットリサーチをします。質問を自分たちで考え、各グループあたり十五人をノルマとして突撃インタビューをしました。アンケートの紙に記入してもらい、ただ回収するといった安易なものではなく、自ら話しかけ学生と英語で話すというのは、難易度の高い交流の仕方でした。実践的に英語を使ういい機会だったと思います。その後、マーケットリサーチの結果をふまえて、原稿、パワーポイントの作成という風に手順を踏んでいきました。

ちなみにインタビューで学生に話しかける際に、「アンケートに答えて貰いたいのですが時間ありますか？」と聞くと九割九分「No」と言われてしまいました。四人連続で断られたときはさすがにへこんでしまいました。ということで、しょっぱなからこちらの情報をまくしたてるようにすると成功率が上がりました。例えば「私は日本の高校生で…」という言い出しで相手の情というかなんとかを引き、「プレゼンを作っているから質問に答えてほしい」ということを伝えます。そこまでこちら側のことを話すと、それなりの時間は経つので「もう答えてやるか」みたいな空気になります。そもそも日本でも「時間ありますか」「あります、大丈夫です」なんて会話見かけませんね。

私と同じように、プレゼンが苦手だ、嫌いだと思っている人は多いと思います。人前で注目を浴びたりすると、緊張して声が出なくなったり、思っていることが伝わらなかつたり…。ですが、私は今回のプレゼンでとても落ち着いて話すことが出来ました。終わった後の達成感はとて大きく、楽しかったなあ、やりきったなあという気持ちを持つことが出来たのです。

どうすればプレゼンで落ち着くことが出来たのか。私は人前に出るとき、頭の中で唱える言葉があります。それは「緊張してもいいことない」です。このことをしっかりと意識して人前に立つのとそうでないのとでは、大きな差があります。唱えたとして、緊張がきれいさっぱりなくなることはないのですが、「緊張することが無駄なことであり、何も自分にもたらしはくれない」と感じることで吹っ切れるものは確かに存在します。このことは私にとって気持ちの切り替えとして、とても有効なものでした。

次に、ゆっくりと話すこと。自分の声の大きさを自分で感じて調整すること。そして、話すときに、少しでも笑顔をつくること。笑顔をつくと肩の力が抜け、味方が増えたように感じられます。

アイコンタクトやジェスチャーなど、プレゼンで必要とされる技術を身に着けることは大切なのですが、それ以上にゆったりとした気持ちをもって話せなくてははいけません。人前に出ることで緊張して、今までやってきた

ことが出し切れないというのは、本当に悔しいことです。私は高校に入学してから授業等で何度も人前で発表する機会がありましたが、その度にうまくいかないことが多く、落ち込みました。いずれも、緊張しすぎたからそうってしまったと感じられるものばかりです。だからこそ、緊張への耐性をつけ、プレゼンへの苦手意識を少しずつ覆していくことを実感している今、嬉しい気持ちでいっぱいです。

オーストラリアで過ごした二週間で、英語の能力を伸ばすことはもちろんですが、それ以外の気持ちの持ち方や何かを作り上げ発表する力など、多くのものを得ることが出来ました。本当に実のある時間だったと思います。

Thank you for reading! (Reporter: GUNJI, Minori)

オーストラリアの学生達

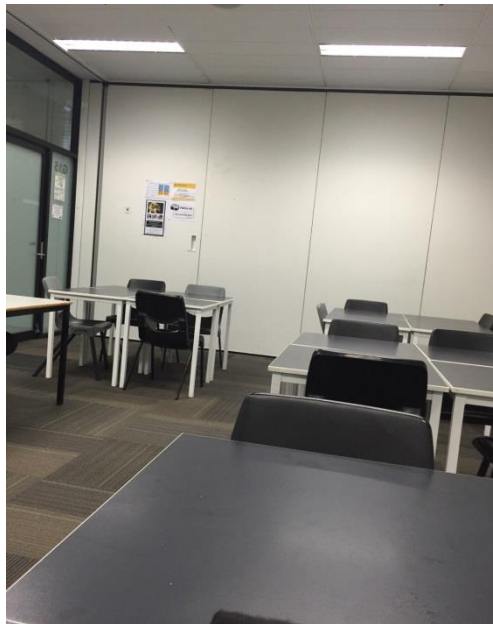
研修期間中は学生をはじめとした、人との出会いがたくさんありました。特に今回はオーストラリアの教育に触れることで視野が広がったので、それらについて報告します。

授業形式

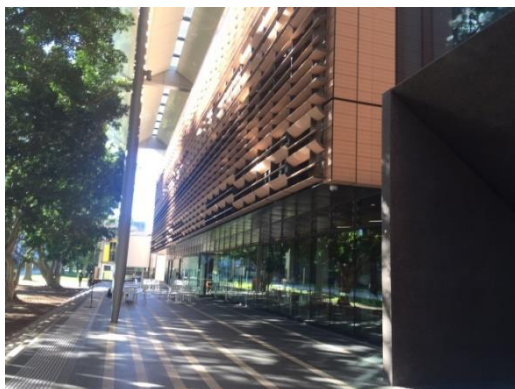
- 授業で大切なのは、「とにかく発言する」こと
- もし答えが思いつかなかったり、先生から投げかけられた質問の意図が分からなければ、それも全て口に出していく
- 先生と学生が会話しながら授業が進められていく→先生と学生で授業を作る
- 学生同士で話し合いがしやすい座席配置
- 様々なことに対してルーズ → ex)
 - ・始業時間の 10 分後から授業が始まる
 - ・授業中に果物を立ちながら食べる生徒
 - ・授業中に音楽を流す



UNSW の構内



UNSW の教室の 1 つ。学生同士が向かい合う座席配置となっている。



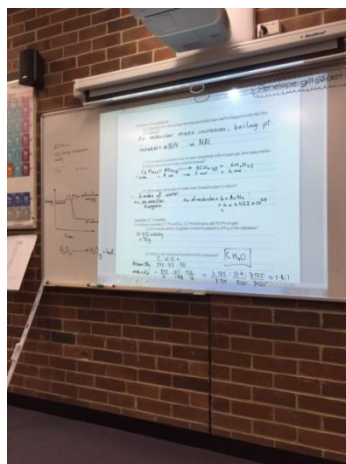
学生

- 留学生が非常に多い
- 2ヶ国語以上話せるのは当たり前
- 勉強がしたくて勉強をしている
- 自分がどうしたいか、どうなりたいかという考えに基づいて行動
- 自立している人が非常に多い
- 時間を無駄にしない
- とにかく情熱がある

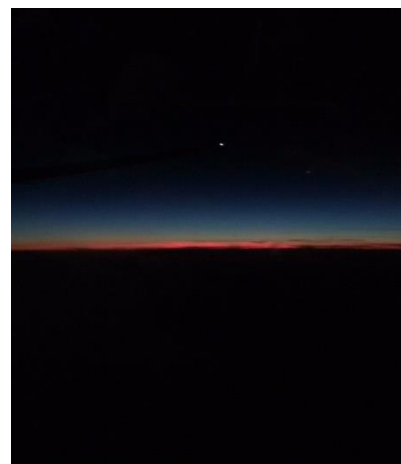
This program was the first opportunity for me to stay overseas for more than a week. Australia has plenty of people who have many kinds of background, a lot of beautiful sight and unique culture. I was very inspired by students in Australia. I compared the education in Australia with that in Japan, and realized that I need to acquire skills to play an active part in the global community. However, thanks to this program I found a way to my dream and I have passion for my work. This two-week experience has changed me. I hope this program will continue and a lot more Nagata High School students will broaden their horizons for the world. I want to go back to Australia in the future. (Reporter:Ueno)



研修で通った UNSW



化学の授業 at Moorefield Girl High School



飛行機から。必ず戻ります。

高校訪問交流

Visiting The Moorefield Girls High School



プログラムの中で、ニューサウスウェールズ州の公立高校である Moorefield Girls High School を訪問しました。実際に現地の高校生とバディを組み、一日の授業を体験させていただきました。



英語で授業を受けるというのは想像以上に難しく、理解が追いつかないまま進んでいく授業に焦りを感じることもあったものの、Moorefield の学生や先生のアットホームな雰囲気や、日本にはない自由な授業のスタイルのおかげで、リラックスして一日の高校生活を楽しむことができました。

一日の最後に、フェアウェルパーティーを開いていただきました。ここでは、BGM として流れた曲をきっかけに会話が弾んだり会場が盛り上がったりと、言葉以上に、音楽は国境を越えて人をつないでくれるということを実感しました。

このプログラムを通して、それまで私は大学生や教授やホストマザーといった、年上の方としか交流していなかったのですが、同世代の学生と交流をもつことができ、オーストラリアのティーンエイジャーがどのような雰囲気を持っているのかを知ることができてとても新鮮でした。日本の高校生より、少し大人びているように感じたオーストラリアの高校生ですが、大学受験の話や、趣味や流行の話など共通の話題がたくさんあり、楽しい時間を過ごすことができました。また、同じ学年の中でも、アジア系、ヨーロッパ系、アメリカ系…などと、いろいろな人種の学生がともに生活していて、オーストラリアの特徴である多民族社会というものを実感しました。

(Reporter: MIYAHARA, Chinatu)



アクティビティ

オーストラリアまで行くのだし、毎日英語漬けで授業を受けるのだろうか。そう思われる方もいるだろう。しかし安心していただきたい。プログラムの中には数々のアクティビティが組み込まれている。ここでは今回の研修プログラム内のアクティビティについて報告します。

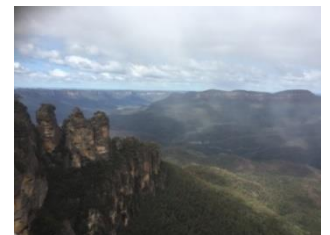


まずシドニーでの市内観光。現地の大学生に案内してもらい、オペラハウスやハーバーブリッジなどなどいくつかの観光地を見学。テレビで見ていたものが目の前にあるという事実に思わず心が華やいた。この時間では全体をざっと見るだけだったが、ゆっくり楽しみたいという方は再度フリーデーなどに訪れてみるのもいいかもしれない。

そして大学内の体育館を借りてのバドミントン。大学内の施設の充実さに驚きつつも、ひさびさに体を動かしてリフレッシュすることができた。また、仲間の意外な一面を発見することができた時間でもあった。



今回のプログラムで個人的に一押しなのがブルーマウンテンズツアー。その名前に聞きなじみのない方もいるかもしれないが、世界自然遺産にも登録されている絶景スポットだ。日本ではなかなか感じることでできない雄大な自然に圧倒される。急勾配の斜面をトロッコで下ったり、鬱蒼と茂る原生林を眼下に望みながらゴンドラに乗ったりと、かなりの満足感を得られるプログラムとなっていた。



また、楽しむべきものの一つに「食事」がある。基本は各自で購入となっていたが、一日だけみんなで一緒に昼食をとることになっていた。予定ではビーチでBBQのはずだったが、あいにくの雨のため今回は女子勢大喜びのチョコレートカフェに変更。各々でチョコレートフォンデュ、チョコレートピザなどをシェアしたり交換し合ったり、またチョコが苦手な人はチーズケーキなどを食べ思い思いの休息を楽しんだ。

Through this program, I learned about a lot of things: people, charities, climate and tourist spots. We enjoyed various activities. Life in Australia was very exciting and I was able to feel cultural diversity. Before going there, I thought English was one of the school subjects. But now, I see it as one of many languages and a communication tool with others. I hope this program will continue for long and many students go to Australia to learn English. (Reporter: NAKASUJI)



ホームステイ

私は Mrs.Siew-Geck Phua 宅に研修期間中の 14 日間お世話になった。シンガポール出身のホストマザーとホストブラザーの Craig(大学生)と Timothy(恐らく高校生)、それに他のプログラムでホームステイしている中国人の高校生 Jason と日本人の高校生 Masa と、大層大人数で賑やかな家庭であった。

私はまずオーストラリアでの食事が口に合うかどうかという心配をしていたが、ホストファミリーがアジア系であった故口に合わないことは全くなく杞憂に終わった。夕食に白米が出る日もあったし、現地で有名な日本人シェフのレシピを模して所謂「つくね」のようなものを出してくださった日もあった。また、ホストファミリーみんなで近所のホテルのレストランに行き、ステーキを食べさせていただいたこともあった。流石は Aussie と言うべきか、ステーキは日本で食べるものとは一味違う美味しさだった。そんな中、一度だけ食事に関するカルチャーショックを受けたことがあった。ある日の夕飯にハンバーガーが出た日だ。別段ハンバーガーそのものに驚いたというわけではない。パンと野菜とハンバーグが供され、「好きな様に挟んでお食べ」と言われてそれに従ったのだが、どこかそのハンバーグに感じたことのない癖を覚えたのだ。“What meat is this?” 私は問うた。

“It’s kangaroo.”…成程、どうりで食べたことのない味がした訳だ。さらに、同じく添え物で出されていたソーセージがあったのだが、私は当時ソーセージといえば豚だという勝手なイメージを抱いていた。まさかと思いながら再度問うた。“Then, what meat is these sausages?” “It’s kangaroo, too.” これにはかなり度肝を抜かれた。オーストラリアではカンガルーを食べるのは知っていたがあくまでも「そういう慣習がある部族もいるよ」だとか、オーストラリア名物として観光客に供される、一種の“ネタ”的な食べ物だとしか思っていなかったのだ。まさか日常的な食材として食卓に並んでいようとは思ってもよらなかった。私はこれにかなり衝撃を受けたのだが、土産にカンガルー肉のジャーキーを買って帰って人に食べさせても微妙な反応しか得られなかったことについては若干不服である。

ホームステイで最も心に残っていることは、ホームステイも終わりに差し掛かった頃にホストマザーがドライブに連れて行ってくださったことだ。夕食後なので少し遅い時間ではあったが、ホームステイしている Chatswood から Milsons Point 周辺まで車でぐるぐると見て回らせてくれた。それより前に自由行動日やシドニー名所観光の日などに訪れた場所もあったが、昼と夜とではまた違った趣があった。ハーバーブリッジは昼間よりライトアップされた夜のほうが格段に重厚で圧倒されるようだった。ルナパークは、以前フェリーの降り間違いで、近くまで来たことはあったが、ピエロと思しき顔（しかもまつげがしっかり一本一本造形されていたり歯列がやけに綺麗だったりと妙にリアルである）の口を通るという意匠のゲートは昼でさえなかなか怖い代物であったのだが、某サイトで「夜ライトアップされると R 指定並みの怖さ」と評されていた通り、夜は尚一層物凄く怖かった。何故にゲートの白色部分を全て発光させようと思ったのか。



そんなドライブの道中、私はホストマザーと色々な話をした。私の英語が聞き取りやすくて心地よいと褒められたり(小さい頃にオーストラリア人講師の下で英会話を習っていたためかと思われる)、日本の学校生活や授業内容について訊かれたりした。その中でも最も印象的だったのは、日本人の食事マナーについての話だ。オーストラリアの人々から見ると日本人が茶碗を持ち上げてご飯を食べたりナイフを使うわけでもないのに食事に左手を使ったりするのが非常に奇妙に見えるというのだ。確かに、私は知識としては他国の人から見るとそれは変に見えるを知っていたが実際に指摘されると狼狽するものである。その時は咄嗟に頭が回らず「日本人は綺麗好きだから、食べ物をこぼさないようにお皿で受け止められるようにそうしているんじゃないかなあ」といったような間抜けな回答しかできなかったが、後で考えると低いお膳を使っていたから皿を持ち上げないと上手く食べられなかったとか、歴史的な背景やもっとまともな答え方が出来たのではと後悔している。よく海外渡航研修の前に言われる「異文化理解と同じかそれ以上に自国の文化をよく知ることが大事」という決まり文句の真の意味を身に染みて感じた気がした。

ホームステイ中に気になったことや不便と思ったことはそう多くないが、強いて言うなれば二つある。一つ目は、事前学習で「部屋に籠ると心を開いてくれないと思われてホストファミリーに不安を感じさせる」と言われた割には、私のホストファミリーはいつも私が帰ると「おかえりなさい！ 疲れているでしょう、ご飯ができるまで部屋で休んでいていいよ」と言って自室に入るよう促したし、友人も同様だったと聞いた。時々「テレビ見る？」と言ってリビングに入れてもらったことはあったがそれも一度は一緒に見たがその時を除くとテレビを見るときも一人だった。夕食のときはある程度家族揃っていて、食事後にも会話が合ったということに関して言えば私のホストファミリーはまだ和気藹々としている方だったと思う。

二つ目の気になったこと、というか困ったことはシャワーについてだ。オーストラリアは乾燥していて、水もあまり多くない、寧ろ場所によっては深刻な水不足に悩まされているという予備知識を与えられ、シャワーを10分で済ませる練習までしてから研修に発った私であるが、そんな練習が何も意味を成さないことが現地入り一日目の夜に早くも発覚したのである。それは向こうの人々が水に関して案外寛容であったから…では決してない。確かにシャワーの時間制限は私のホストファミリーでは設定されなかったし、UNSWの先生も「自分が快適であることが最重要だからシャワーの時間なんて気にしないでいいよ」とは仰っていたがそういう問題ではない。私は、あくまでシャワーの出始めからちゃんと使えるものという前提で練習をしていた。しかし、忘れてはいけない。シャワーで初めからお湯が出るのは温泉だか銭湯くらいのものであるということ。そして、日本なら八月は夏なので水シャワーを浴びるくらい何でもないが、オーストラリアの八月は水シャワーなど浴びようものなら凍えてしまう寒い冬だということ。さらに悪いことに、私の使っていたシャワーは五分前後水を出し続けなければお湯にならなかった。頭から順に洗って下半身を洗い始める頃にやっとお湯になるといった具合である。控えめに表現してもさながら地獄のようであった。金輪際あんな凍えるようなシャワー体験など真っ平御免である。とにかくシドニーでは(人によるが)シャワーの時間は思ったより気にしていない人が多いそうだとということと寒い時期のなかなかお湯が出ないシャワーは鬼門であるということが伝わればそれでよい。

このホームステイ体験では、困ったことも含めて日本ではできない生活体験や日本では決してすることがなさそうな話題で会話ができてとても貴重な経験を得ることが出来たと思う。そして、何よりも「日本人は親切だ」というのはよく巷でも囁かれるテレビ番組のネタにされたりもするが、ホストファミリーも含めシドニーの人々は正直なところ日本人の数倍親切であったように感じた。それは私が外国人ということや、一応は“お客さん”であったからという理由もあるかもしれないが、果たして日本人は私が接したシドニーの人々のように“お客さん”をもてなすことができるのだろうか。シドニーの人々は私たちを“お客さん”といえども、初対面でもまるで友人のように接してくれた人もいた。相手を受け入れようという姿勢が見て取れた。だが、日本ではどうだろう？ 思うに、“お客さん”はいつまでも“お客さん”の域を出ないような接し方しかされていないように思う。いつまでも他人行儀なのだ。受け入れる人にフィルターでも設けているようである(そこに関しては私も人の

ことをとやかく言える立場ではないが)。一期一会だなんて大層な諺がある割には余り新しい出会いを大事にしていけないではないか。とは言うものの、何も日本人全員が不親切で閉鎖的だと言うつもりはない。実際に滞在中、シドニーの人々との関わり合いの中で日本でも感じたことのあるような何かを感じたのだ。何だっけなあ、日本でもこういう人いるよな、誰だったかなあ…と考えて、やっと気付いた。シドニーの人々の人間性はコッテコテの大阪のおばちゃんのそれに似ている。だからといって人を押しのけて走るとか値切り大魔王だとかといったところに目を向けている訳ではない。前者はともかくシドニーの人々が値切り行為をしているのは見たことがない。初対面でもフレンドリーに接してくれることや、何かとついでお菓子をくれることや、ふとしたときに笑いを提供してくれることなど、そんな温かみに共通点を感じた。だから(特に関西圏出身の私たちにとっては)シドニーは尚のこと過ごしやすく感じたわけである。ここで感じた“大阪のおばちゃんの温かみ”が日本でももっと感じられるようになればいいのに、そのためにはまず自分が人に温かみを持って人に接しなければ…と思った。

During my stay, I felt kindness and warmth a lot. My host mother always seemed to try hard to make me happy and many people I met in Australia treated me just as my host mother did. Thanks to them, I had a great time in Australia. I really look forward to meeting them again. I found that many people in Australia are really interested in Japanese culture and want to visit Japan. I want to keep in touch with them and show them around Japan's famous sites when they come to Japan. I want to do as much as I can to make them happy, just like they did for me. (Reporter: TANIGUCHI)

自由行動日(1)

週末にはフリーデイがあった。1週目の土曜日、2週目の土曜日・日曜日の計3日間だ。私は、タロンガ動物園、ルナパーク、マンリービーチに行ってきた。

タロンガ動物園は、サーキュラー・キーからシドニーフェリーで約15分だ。オーストラリアの代表的な動物である、コアラやカンガルー、カモノハシはもちろん、爬虫類から哺乳類、その他の生き物も飼育されている生き物の種類はとても豊富だ。コアラなどと写真を撮ったり、アスレチックをしながらカンガルーなどの動物の真上を通ったりとただ見るだけではなく、様々な楽しみ方がある。なかでも、アシカショーは人気がある。会場前から長い列ができ、席はすぐに埋まってしまう。日本でもショーは人気がある。そこは日本もオーストラリアも変わらないのだと感じた。



Taronga



Luna Park

ルナパークは、1930年代の雰囲気を残したままのテーマパークだ。入場料は無料で、乗り物に乗る場合のみ料金がかかる。開園時間がわからなかったため、10時頃には開いているだろうと思い、行ってみたところ開いておらず開園時間も書いていない。乗り物も動いていなかった。ちょっと散歩した後、もう一度行ってみると、乗り物は動いていないものの開いてはいた。入ってみると海沿いに散歩道みたいなものがあり、ハーバーブリッジなどがよく見え景色がよく、散歩している人も多かった。

11時過ぎになると乗り物が動き出した。そこでも驚いたのが、どの乗り物もシンプルだが、ダイナミックなのだ。特に観覧車は想像していたものとは異なり、速いスピードで1回に何周もしていた。日本のテーマパークといえど何時間も並んで乗っているのは一瞬だけということが多いが。ここはその心配はなかった。並ばずに乗れるうえに1回の所有時間は長い。1日というよりは2~3時間楽しむという感じで、地元のアットホーム感があった。

日本が夏真っ只中の8月、南半球に位置するオーストラリアは冬である。それにもかかわらず、ビーチにはたくさんの方がいた。“So cold!”と叫びながらも家族で海にダイブしていた。家族連れも多く、週末ののんびりとした雰囲気が漂っていた。



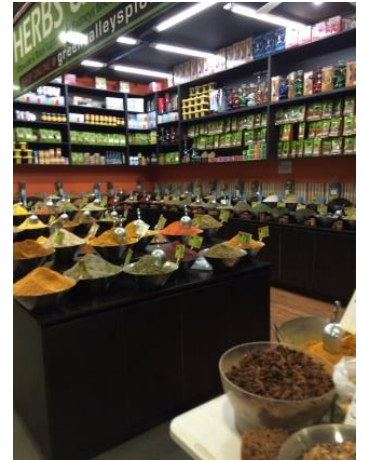
Beach

Australians are very calm. I felt that time passes slowly there. I was surprised to learn the amusement park opens at 11:00. Australians spend a long time with their family. I thought it was important, and I wished I could spend more time with my family. (Reporter:Ogawa)

自由行動日(2)

First day

ホストマザーにホームステイ先の Leichhardt という町を案内してもらい、一緒にショッピングを楽しみました。

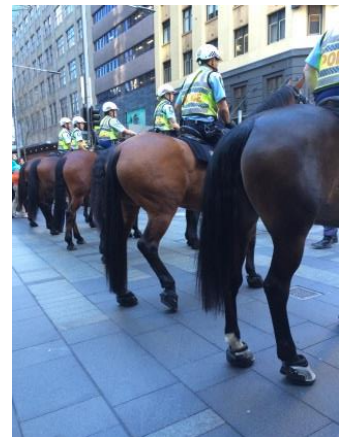


Second day



フェリーに乗って、タロンガ動物園を訪れました。シドニータワー、オペラハウス、ハーバーブリッジが一度に見渡せるだけでなく、キリンも同じフレームに収めることができ、まさにシドニーの動物園でしかできないような体験ができました。

その後、シドニータワーのあるショッピング街、Town Hall に少しお土産を見に行ったところ、思いがけないものに出会いました。馬が横並びで交差点の道をふさいでいたのです。その日、ホストマザーになぜ馬を使うのかを聞いてみたところ、シドニーのあるニューサウスウェールズ州には騎馬警官隊があり、人々はパトカー、バイクに対しては簡単に攻撃しますが、生き物である馬には直接攻撃することはほとんどないため、群衆のコントロールに馬を使用しているそう。少しすると、遠くからデモ隊の声が近づいてきました。それは、WELCOME REFUGEES という難民受け入れ問題に関するデモでした。多くの人々の生の声を聴けて、鳥肌が立ち、国による考え方の違いや、行動の仕方の違いを目にできた瞬間でした。



Third day

ハーバーブリッジが見える海沿いのレストランでランチしようとしたところ、空軍の行進が始まりました。先日のデモ行進に続き、偶然出会えたものでした。



その後も町をぶらぶらしたところ、世界遺産であるシドニーセントメアリー大聖堂にたどり着きました。

入った瞬間吸い込む空気が変わり、日が差し込んでくるスタンドグラスの美しさに圧倒されました。大聖堂からあふれ出る、自分がどう生きたいのか、どうありたいのか、どうなりたいのかを考えさせる力に、私の目から涙がこぼれ落ちそうになりました。世界史は教科書で見ればただの文字の羅列ですが、実際にその物事は起こった事実であり、今の世界はその事実の連続、積み重ねによってできています。そのことを痛感させられた私は、今私たちが生かされている世界のこ

とをもっと知りたい、勉強したいと強く感じました。日本では、日常的に宗教を感じることはなく、どちらかというとその信教を疑っている方でした。しかし、キリストから発せられるパワーが人々の心の奥底に深くささることを納得せざるを得ない説得力がそこにはあり、見えない、でも見えているかのようにも感じる力がありました。宗教も絵画も音楽も、すべてその時代を生きた人々が作りあげたひとつの歴史であり、すべて同じ次元の間に存在していることを深く感じることができ、自分の感受性に関わる部分の勉強、勉強というかしこまったものではなくて日々の生活、つまりは人生そのもので、自分が大きくするためにたくさんのことを吸収し、自分自身の中のひとつとしていきたい、そう強く思いました。

無計画なままふと立ち寄ったこの大聖堂に、私は人生で一番感動しました。こんな感情になったのも初めてで、オーストラリアに来るべきして出会った、そんな運命に家族、友だち、先生、今まで出会ったすべての人と、今の私を作り上げている経験、まわりの環境への感謝の気持ちがこみ上げてきました。運命をつくり上げるのも自分、ふと奇跡だと思ったことも過去の自分が積み重ねてきた今の事実。それそのものが人生なのだな、と学ぶことができました。

I met a lot of people who had passion that I would never meet in Japan. One of them, Marchia said “I practice 1000 times when everybody does 100 times. I make efforts just because I want to achieve my goals. It’s very simple.” I was so impressed by her thought. Now the second term has started, I am determined to learn everything as much as possible.

Everything I experienced when I was by myself was precious: great views, different cultures, nature in Australia, and even getting lost. Luckily I found my best friend through this program. I’m sure that these emotions are special and something that we can feel only when young. I want to try everything I want to and be myself. (Reporter: TABUCHI)

オーストラリアのアボリジニ・多文化社会について



現地では様々な発見がありましたが、私は特にアボリジニや多文化社会についてご紹介します。

私たちはまず、ニューサウスウェールズ大学でオーストラリアの人種に関する歴史の講義を受けました。

オーストラリアの先住民族であるアボリジニの祖先は今から約6～7万年以上も昔にオーストラリア大陸に住み着いたと言われています。数千ともいわれる部族が存在し、狩猟・採集中心の生活を送り、自然と共に生きていました。また、文字を持たなかったため、部族の

掟や知恵は壁画や物語にして受け継いできました。

18世紀にイギリス人がオーストラリア大陸に上陸してから、アボリジニは迫害の対象とされ、理不尽な逮捕や虐殺が行われました。1828年には開拓地に入るアボリジニをイギリス兵が自由に殺害できる法律が施行され、アボリジニの人口は9割以上も減少したそうです。19世紀末にはゴールドラッシュが起こったことで移民が集まり、その結果移民を制限する法律ができました。オーストラリア連邦が発足した際には白豪主義の理念が生まれ、1910年頃～1970年代にかけてアボリジニの子どもたちを白人家庭のもとで育てるという政策が行われました。これにより、「盗まれた世代」と呼ばれる彼らのアボリジニのアイデンティティが失われてしまいました。その後は有色人種に対する差別を前提とした移民政策が廃止され、多文化国家としての道を歩き始めました。

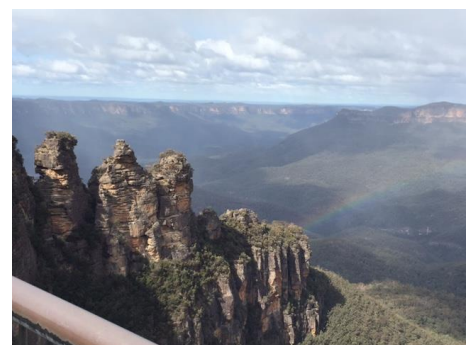
現在のオーストラリアにもアボリジニの文化は残っています。休日に訪れた世界遺産のブルーマウンテンズ国立公園のスリーシスターズについて、今もアボリジニによる伝説が語り継がれていました。また、シドニーにアボリジナルアートのギャラリーがありました。

最終日には王立植物園を訪れ、アボリジニのガイドさんに案内してもらいながらオーストラリア固有の植物について勉強しました。そこでは草花の特徴だけでなく、工夫次第で食べられたり、薬として利用できたりすることも教わりました。その後、アボリジニが使う道具類を実際に見せてもらいました。ブーメランや石で作られた斧や矢じり、草を編んで作られたおくるみなどに触れることができました。この体験から、いかにアボリジニが自然や植物とうまく共生してきたかが良く分かりました。

What is needed for the future leaders? You will probably mention charisma, intelligence or courage. I think the most important thing is to understand others deeply. It is not sticking to your own idea, rather accepting other ways of thinking and behavior. These days, due to the development of the Internet and globalization, people and items go back and forth across the globe. So cross-cultural understanding is more important.

Have you ever heard that Australia is called the salad bowl of races? In fact, it is a multicultural society. There were many people from various countries and streets were lined with restaurants from all over the world.

I learned how Aborigine has lived and their sad history during this program. I thought we should



learn the wonderful wisdom using plants from Aborigine. Also I hope that Australia will develop further as a multi-cultural nation.

I want to act as a bridge to build a better relationship between Japan and other countries in the future. To become such a person I need to acquire a large stock of knowledge and understand differences in culture, customs and so on. I think this experience was the first step to my dream. I will never forget what I learned in Australia. I will make an effort and realize my dream. (Reporter: Haruki)

